

本編 20 「第一大『捷度』」 その 9 「マガダ国に仏教が広まる」 2020.11.28

○旧友ビンビサーラ王を預流果に悟らせる

ガヤーシーサ（象頭山）の次に、ラージャガハ（マガダ国首都王舎城）に向かつて弟子千人（カッサパ三兄弟と弟子たち）と遊行。ラージャガハに進み（avasari 城内に入っていない）、ラッティ（杖）林 vana の園林 uyyāna スパッティタ・チェーティヤ（霊地）に住んだ。→精舎が出来るまではこういう処に野宿。

マガダ国のビンビサーラ王は聞いた：釈迦国の子ゴータマが釈迦姓から出家してラージャガハに至り、スパッティタ・チェーティヤにおられる。かの世尊ゴータマにはこのような良い名声が挙がっている kalyāṇo kittisaddo abbhuggato, 「かの世尊は阿羅漢、正等覚者……iti pi so bhagavā……」。彼はこの世界で天、魔、梵天、沙門バラモン、人・天の人々を自ら證知現証して abhiññā sacchikatvā 説いている。彼は始めも善く中ほども善く終わりも善く、適切な意味を伴い適切な文言を伴う sāttham savyañjanam 教えを説き、完全で清浄な梵行を明らかにした。このような阿羅漢に会うことは善いことだ。→たぶん後の定型句がここに。

そこでビンビサーラ王はマガダ国のバラモンの居士 brāhmaṇagahapatika たち十二万人と一緒に釈尊 [とカッサパ三兄弟と千人の比丘たち] がおられるところに行った。彼らは、ウルヴェーラ・カッサパの下で大沙門（釈尊）が修行しているのか、その逆なのかと [疑問に] 思った。

釈尊は彼らの意を知って、カッサパに問う。

「あなたはどのようにして火祭りの宗教を捨てたのですか？」

「火祭り宗教は色、声、味などの欲を説きます。これは汚れたと知り、楽しまなくなりました。」

「では、どこにあなたの心は楽しんでいますか？」

「私は寂靜の道を見て、無執着・無所有となり、欲有に執着なくなりました。」

そして、カッサパが座より起ち、上衣を偏袒にし、頭面足礼して、「世尊が我が師、私は弟子です」と三度唱えた。

釈尊は十二万人に次第説法し、全員に法眼が生じた（預流果に悟った）。

→しかしこの註釈は：法眼とは預流道の智慧 dhammacakkhuṃ ti sotāpattimaggañāṇam.

その中で一万人は在家信者の名乗りを上げた。

ビンビサーラ王は法を見 diṭṭhadhammo、法を得 pattadhammo、法を知り veditadhammo、法に悟入し pariyogāḥadhammo、疑惑を超え tiṇṇavicikiccho、迷い

がなくなり vigatakathamkatho、無畏を得 vesārajjappatto、師の教え以外に拠ることがなくなった aparapaccayo satthu sāsane。→預流果（不退転）。

### ○叶った五つの願い

ビンビサーラ王は釈尊に言った：

「私には五つの願いがありましたがそれが今日みな叶いました：

- ①灌頂を受けて王になろう。これは叶っています。
- ②我が国に阿羅漢正等覚者が訪れますように。これは今叶いました。
- ③私は世尊にお仕えしよう payirupāseyya。これは今叶いました。
- ④世尊が法をお説きになるように dhammaṃ deseyya。これは今叶いました。
- ⑤私は法を領知しよう ājāneyya。これは今叶いました。」

→ājanāti=aññāti→aññāta。コンダンニャ長老のときと同じ表現で預流果（自分で宣言）。

※『スッタニパータ』に出る釈尊出家直後に王と出会ったときの話はここでは省略。

その後、在家信者の名乗りを上げ、[当日はもう午後だったので] 翌日の食事のお布施を申し出て、沈黙による承諾を得た。承諾を知って、王と十二万人のバラモン居士たちは去った。

翌朝、食事の準備ができたと [スパッティタ・チェーティヤ（霊地）に] 知らせを遣り、釈尊は比丘千人と共に王舎城に入った。入るとき、帝釈天が少年の姿を化幻して先導し、偈を唱えた。

「己を調御し離脱した世尊が調御され離脱した以前の結髪行者を率いてラージャガハにお入りになる。」

人々が帝釈天を見て「誰にお仕えしているのだろう」と言ったので、

「勇猛で、すべてにおいて調御し、比類なき仏、阿羅漢、善逝に私はお仕えます」と答えた。

### ○竹林園をサンガにお布施

ラージャガハの王の住居で世尊と比丘衆に食をお布施した。食後：

王は「世尊 [と千人の比丘たち] はどこにお住みになるべきか」と考え、町から遠からず近からず、[比丘たちにも] 相談に訪れる町の人々にも行き易く、静かな場所を選び：

金の瓶から [水を] 世尊に灌ぎながら、「我が竹林園 veḷvāna-uyyāna を仏を上首とする比丘サンガにお布施します」と申し出た。世尊は園林を受け、ビンビサーラ王に説法し、喜ばせ、去った。

この因縁により比丘たちに法を説き、「比丘たちよ、園林を〔受けることを〕認める *anujānāmi*」と宣言。→個人ではなく比丘サンガの所有（管理は在家に依頼する）。

※園林だけ。精舎建立という発想はまだなかった。

※『餓鬼事』第5話：比丘サンガにお布施するとき、ビンビサーラ王の91劫前の親族の餓鬼たちがその功德を自分たちに廻向してもらえると期待して集まり、廻向されなかったので苦悩して夜通し呻き、その声に怯えた王が早朝に釈尊に相談に行き、事情を聞いてもう一度食事をお布施し、今度はその功德を廻向して餓鬼たちを助けてあげた、と。

藤本晃『餓鬼事経——死者たちの物語』サンガ

### ○サーリプッタ・マハーモッガラナーナ両長老

250人の弟子を持つ懷疑論者サンジャヤの二人の弟子サーリプッタとモッガラナーナ。先に不死を体得した *amatam adhigacchati* 者が相手に告げると相約束。

時に、〔五比丘の一人〕具寿アッサジが早朝にラージャガハに托鉢に入る立ち居振る舞いの寂靜さを見て「世に阿羅漢あるいは阿羅漢道者がおられるなら、この方に違いない」と感銘を受け、托鉢が終わるまでは声をかけず、ただ後ろに随って歩いた。それが道を求める者のやり方。

托鉢後のアッサジ長老に近づいて挨拶して、「あなたの諸根は清浄です。誰を師として出家しましたか？誰の教えを愛楽していますか？」と問う。→ウパカ

「釈迦国より出家した釈氏の大沙門あり。」

「どのような教えでしょうか？」

「諸法は因より生ずのだが *ye dhammā hetuppabhavā*、

如来はその因とその滅を説く *tesam hetum tathāgato āha tesam ca yo nirodho*。」

この言葉を聞いて遠塵離垢の法眼を得た。（預流果）「これだけでも法です。」

モッガラナーナ尊者に正確に繰り返して報告。→遠塵離垢の法眼を得た。

二人は250人の同行弟子たちに「私たちは釈尊の下で出家します。」「ついて行きます。」師匠のサンジャヤに告げると、「待ちなさい。三人で弟子を導こう。」三度止められたが構わず竹林園に。サンジャヤは熱血を吐いた。

サーリプッタ尊者とモッガラナーナ尊者が遠くから来るのを見て、世尊は比丘たちに告げた：

「あそこに来る二人の友人はコーリタとウパティッサ〔二人の旧名〕で、私の弟子たちの両腕になるでしょう。」

二人が来たときも、二人に「あなたたちは……。」

出家を願い出ると、「来たれ比丘よ」。

○噂は七日だけ

マガダ国の著名な名家の子がこぞって出家するので、人々は誇った。

「沙門ゴータマが来て子を奪う。夫を奪う。家系を断絶させる。まず千人の結髪行者を出家させ、今や250人のサンジャヤの弟子たちを出家させた。」

人々は比丘たちを見ても同様に、「大沙門がマガダ国に来てサンジャヤの弟子をみんな誘惑した。今はまた誰を誘うのか」と詰った。

比丘たちは人々のこの憤りを聞き、世尊に報告した。

→比丘たちが個人的にその場で直接言い返したり言い訳したりすることはない。

まず釈尊に報告。釈尊が対処法を比丘たちに告げる。

※比丘は在家の権利も義務も放棄している。我が残っていても言い返す道理がない。

→在家に反論することや在家を批判すること自体が後に比丘戒で禁止された。

違反したら、その在家に懺悔しなければならない。それも戒律で制定された。

「この声は長続きしない。七日間だけでしょう。もし非難されたら、この偈を唱えてください：

大雄・如来たちは正法によって誘う *nayanti ve mahāvīrā saddhammena tathāgatā*。

法によって誘う智者を誰か妬むや *dhammena nayamānānaṃ kā usuyyā vijānataṃ*」

人々は、沙門釈子たちは法によって誘っているものであり非法によってではないと知り、この非難は七日ピッタリで止んだ。